

無常と刹那

<いろは歌に見る無常>

無我…文字通りに読めば、無我とは我が無いことです。我（私）はこの世に確かに存在しているのに、
我がないとはどういうことでしょうか。

無欲…文字の通りに読めば、無欲とは欲が無いことです。無欲とは意欲も捨てることでしょうか。

無常…文字の通りに通り読めば、無常とは常には無いことです。ものの哀れ、はかなさでしょうか。

我儘（わがまま）という言葉があります。自分（我）がまま（儘）に振る舞うから、「我儘」と言います。別の言い方をすると、「我が強い」ということです。では、無我とは何でしょうか。それは、我執（自分に執着すること）を捨てることであって、我を無くすことではないようです。仏教的には、無我と言いますが、哲学的には「非我」（我に非ず）と表現します。

無欲は、どうでしょうか。無欲の勝利とか言いますが、意欲がなくては勝てないです。無欲だけでは凡になる。不欲が如く非欲が如く、本来在るべきに知を磨ぎ澄ます。知らぬがままに知るを覚える事もある。要は、欲に執着しない少欲知足ということなのです。

無常は「いろは歌」にも謳われています。いろは歌は、すべての仮名を重複させずに使って作られた誦文のことで、七五調の今様の形式となっています。

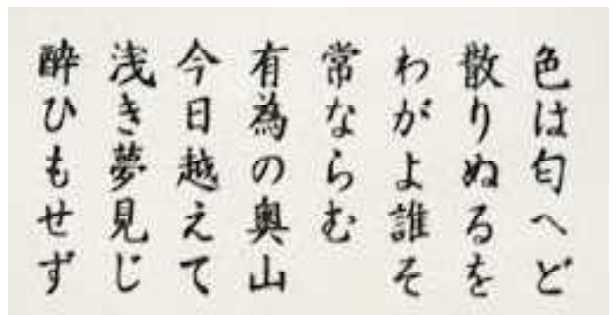
いろはにほへどちりぬるを	色はにほへど	散りぬるを
わがよたれぞつねならむ	我が世たれぞ	常ならむ
うゐのおくやまけふこえて	有為の奥山	今日越えて
あさきゆめみじゑひもせず	浅き夢見じ	酔ひもせず

諸行無常
是生滅法
生滅滅已
寂滅為樂

いろは歌は『涅槃経』
の中の無常偈(むじょうげ)
「諸行無常、是生滅法、
生滅滅已、寂滅為樂」
(諸行は無常であってこれ

は生滅の法である。この生と滅とを超えたところに、真の大樂がある)の意識とされています。歌の作者は諸説不明ですが、仏教に造詣の深い者でしょう。歌の詳細な意味解釈も、また様々にあります。

諸行無常とは、諸行＝「この世の一切の事物・現象。万有。万物」は、無常＝「生じたり変化したり滅したりして、常住・一定のままではない」という意味です。これは、「いつかは滅して無くなる」というだけではなく、絶えず生滅し(生まれては滅する)変化しているという意です。例えば、物品は時が経って古くなるのではなく、生産された瞬間からもう劣化や風化が始まっているのです。人も生まれた瞬間から、寿命が刻々と縮まっていきます。さらに、滅するだけでなく、同時に生じてもいます。例えば、お風呂で落とす垢は、一生分の量はかなりのものですが、それでも体が消滅しないのは、新しく細胞が生成されるからです。それは人や物が生まれた時と死去する時だけが無常ではなく、毎時毎秒、一瞬に生じるものと滅するものが存在するということです。現象もまた同様に、瞬時の連続性と積み重ねの現われです。



<刹那に生きる>

つまり、無常とは、その一瞬一瞬の連続であって、その冥利は「刹那に生きる」ことにあります。刹那とは、仏教における時間の単位で、指をひとはじきする（弾指）間に65刹那あるとする説、24時間=30牟呼栗多=900臘縛=54,000恒刹那=6,480,000刹那とし、1刹那の長さを1/75秒に比定する説、刹那

に具体的な時間的長さを設定すべきでないとする説など諸々です。いずれにしろほんの一瞬です。

また宗派によっては、人間の意識は一刹那の間に生成消滅（刹那消滅）を繰り返す心の相続運動であるとしています。それについて曹洞宗の道元は、『正法眼蔵』の「発菩提くましかもやになんくもみまんなのなかきにんにまのんひな心」巻で、「悟りを求める意志も、悟りを開こうとするのもその無常性を前にするからであり、常に変化するからこそ、悪が消滅し、善が生まれるのである」と説明しています。

大乘仏教における唯識は、「あらゆる諸存在が個人的に構想された識でしかないのならば、それら諸存在は主観的な存在であり客観的な存在ではない。それら諸存在は無常であり、時には生滅を繰り返して最終的に過去に消えてしまうであろう。即ち、それら諸存在は『空』であり、実体のないものである（諸法空相）」としています。色即是空、空即是色…これを医学や物理的な見地で解すれば、物体は光を吸収して発色し、我々はそれを網膜に映して虚像を認知しているに過ぎないわけです。いわば「映写機（投影）とスクリーン（虚像）、視聴者（視覚認識）」のような関係です。光のない暗闇では、何も見えないからして、それはまさしく「空」です。触って判別することも、触覚という識であって「空」です。（全て神経伝達による実体なきもの）このように仏教における唯識は、西洋哲学（現象学）における唯物論や唯心論とは違う視点で語られています。

< 量子論と無常 >

つまり「無常」とは、「生滅を繰り返した上に、最後は時間と共に消え去っていく『空』であること」です。また、仏教の唯物観は、量子論や宇宙観にも相通じます。それは、「宇宙は『無』からうまれた。しかし『無』も完全な『無』のままではいられない。真空から粒子が生まれては消えている。電子は波と粒子の両方の性質をもち、複数の場所に同時に存在できるが、観察上はひとつに確定する。実体があるようで、ないようなもの。（不確定性原理）」というものです。難しいことはさておいて、仏教における無常は、現代科学おも凌駕する壮大な宇宙観を表したものとも言えそうです。

無我、無欲、無常…仏教においては、「非」ではなく「無」と表現する所以は、生成消滅そして諸法空相をもって空とする所にある訳です。

私達は刹那に生きています。これは、世俗で言う「刹那的に生きる」とは真逆の意味で、「もののあわれやはかなさ」は、その一生にあるだけでなく一瞬一瞬にあります。また、いろは歌にも無常が謳われ、それが遥か彼方の宇宙観にも通じていることは、一語一句の深みや重みを感じさせます。さらに科学も凌駕する遠い昔の人々の達観、深い見識には、今さらながらに驚きを禁じ得ません。

< 探り・噛みしめ・馳せる >

解釈とは、読み返して形式理解するだけではなく、言葉を噛みしめ、真意を探り、想いを馳せること。いろはにほへと…一見、単純に思える仮名の並びにも、実に奥深い味わいがあります。探り・噛みしめ・馳せる。いろは歌を単なる仮名の羅列的な並びと見れば、何も見えてきません。

同様に、世の中には一見意味がないように見えるものにも、確たる存在とその理由があります。

生成消滅、諸法空相。感知や読解、解釈を通して広がる世界や宇宙もまた無限です。

参考文献 ☆Wikipedia の各項目 ☆施本「仏教・空の理解」(岩瀧山 往生院六萬寺) ☆「えっ 仏教語だったの」(東本願寺)

☆親鸞.com (中村僚) ☆100分で名著「仏陀の教え」(NHK) ☆ころの時代「ブッダの人と思想」(NHK)